第十篇　地　形

軍を全うするを上と為し、軍を破るはこれに次ぐ。（第三篇　謀攻）

第八篇　九　変

君命に受けざる所あり

将　九変の利に通ぜざる者は、地形を知ると雖も、地の利を得ること能わず。

第九篇　行　軍

四軍の利

山に処し、水に処し、斥沢に処し、平陸に処するの軍

軍を処き　敵を相る

地の道　地形に通・掛・支・隘・険・遠なる者あり。

兵に走る者あり、弛む者あり、陥る者あり、崩るる者あり、乱るる者あり、北ぐる者あり。凡そ此の六者は天の災に非ず、**将の過ち**なり。

敗の道

将の至任、察せざるべからざるなり

上将の道

敵を料り勝を制し、**険阨・遠近を計る**は上将の道なり。

戦道必らず勝たば、主は戦う無かれと曰うとも必らず戦いて可なり。

進みて名を求めず、退きて罪を避けず、而して主に利なるは、国の宝なり。

惟民是保ちて

卒を視ること嬰児の如し、これと深谿に赴くべし。卒を視ること愛子の如し、これと倶に死すべし。

兵を知る者は動いて迷わず、挙げて窮まらず

敵の撃つべきを知り　吾が卒の以て撃つべきを知り、而

地形の以て戦うべからざるを知らざるは、勝の半ばなり。

彼を知り　己れを知れば、勝　乃ち危うからず。

天を知りて　地を知れば、勝　乃ち全うすべし。

第十一篇　九地（前段）

第十篇　地形

地形に通・掛・支・隘・険・遠なる者あり。（地形の常）

我の用兵

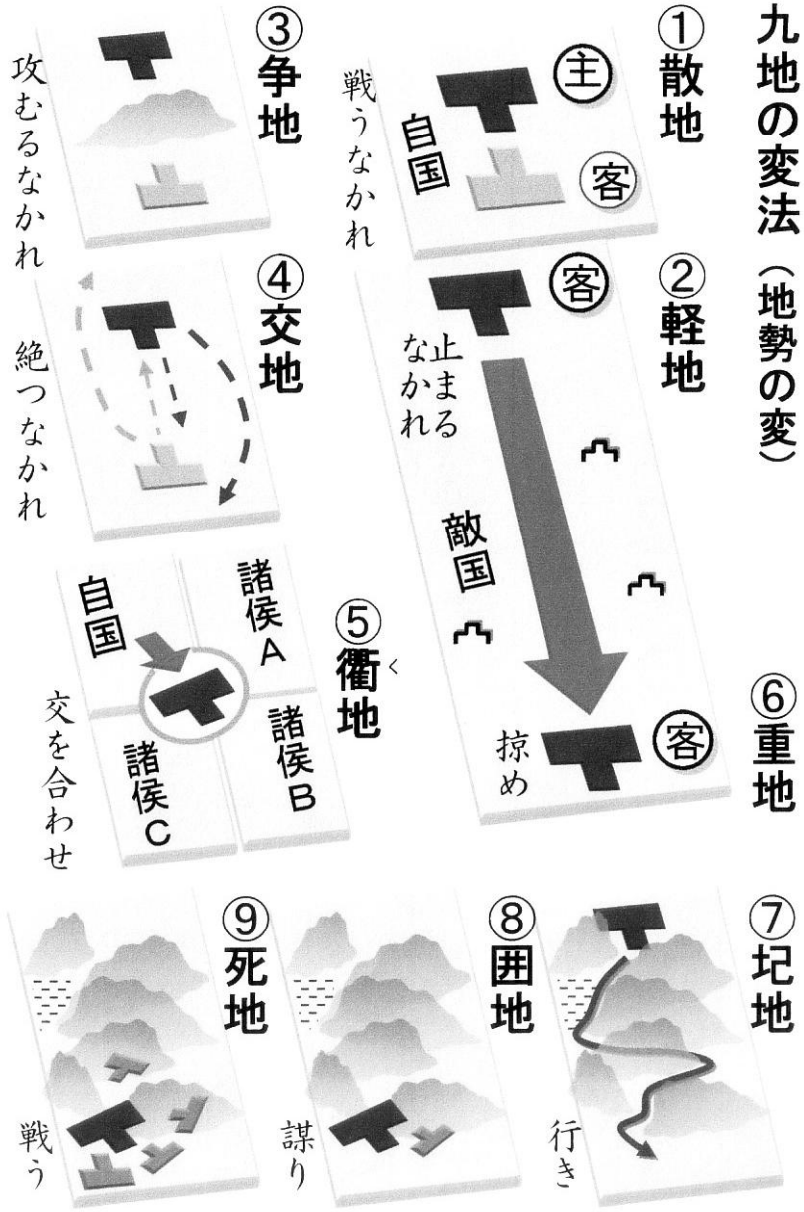
敵の用兵

兵に走る者あり、弛む者あり、陥る者あり、崩るる者あり、乱るる者あり、北ぐる者あり。

兵士の心理状態

九地の変法（地勢の変）

①散地　②軽地　③争地　④交地　⑤衢地　⑥重地　⑦圮地　⑧囲地　⑨死地



自国内で戦う（主客の勢）

敵国内で戦う

主戦の法

○利に合ひて而ち動き、利に合わずして而ち止む。
○先ず其の愛する所を奪はば則ち聴かんや。
○兵の情　速を主とす。

地の利　敵の気を奪い、先手を取る

客たるの道

これを往く所なきに投じ、死すとも且(は)た北(に)げず。死せば焉(いずく)んぞ士人　力を尽すを得ざらん。

やむを得ざるの道

率然

呉越同舟

勇を斉えて一の若くにするは**政の道**なり。剛柔皆な得るは**地の理**なり。

（以下、続く）

第十一篇　九　地

前段参照

九地の変法（地勢の変）①**散地**戦うなかれ　②**軽地**止まるなかれ　③**争地**攻むるなかれ　④**交地**絶つなかれ　⑤**衢地**交を合わせ　⑥**重地**掠め　⑦**圮地**行き　⑧**囲地**謀り　⑨**死地**戦う

主戦の法（自国内で戦う）利に合ひて而ち動き、利に合わずして而ち止む。

屈伸の利

客たるの道（敵国内で戦う）これを往く所なきに投じ、死すとも且た北げず。

人情の理　深ければ専　浅ければ散

率然　呉越同舟

政の道　地の理

将軍の事　三軍の衆を聚め、これを険に投ず

①**散地**　主　客　自国

②**軽地**　これをして属せしめんとす　客　国境　敵国　絶地

③**争地**　其の志を一にせんとす

④**交地**　其の後に赴かんとす

⑤**衢地**　其の守りを謹しまんとす　諸侯A　諸侯B　諸侯C　自国

⑥**重地**　其の食を継がんとす　客

⑦**圮地**　其の途に進まんとす

⑧**囲地**　其の闕を塞がんとす

⑨**死地**　これに示すに活きざるを以てせんとす

兵の情、囲まるれば則ち禦ぎ、已むを得ざれば則ち闘い、過ぐれば則ち従う

四五の者、全て知る（地形・地勢）

無法の賞を施し、無政の令を懸く（人情の理）

覇王の兵　これを亡地に投じて然る後に存し、これを死地に陥れて然る後に生く

第十三篇　用　間

兵の事を為すは、順ひて敵の意を伴るにあり

第十二篇　火　攻

兵とは国の大事、死生の地、存亡の道、察せざるべからざるなり。（第一篇 始計）

国を全うするを上と為し、国を破るはこれに次ぐ。（第三篇 謀攻）

火攻に五あり（五火）

人に火す　積に火す　輜に火す　庫に火す　隊に火す

○火を行うには必ず因あり、烟火は必ず素より具う。
○火を発する時あり、火を起こす日あり。
○時とは天の燥けるなり。
○日とは月の箕・壁・翼・軫に在るなり。この四宿の者は風起るの日なり。

数（＝技術）

五火の変に因りてこれに応ず

①火内に発せば則ち早くこれに外に応ず。
②火発して其の兵静かなる者は、待ちて攻むる勿れ、
③火外に発すべくして内に待つ無きは、時を以てこれを発す。
④火上風に発し、下風を攻むる無かれ
⑤昼風は久しく、夜風は止む。
⑥凡そ軍必ず五火の変を知り、数を以てこれを守る。

水は以て絶つべく、以て奪ふべからず

火を以て攻を佐くる者は明、水を以て攻を佐くる者は強。

国を安んじ軍を全うするの道

明主

慮る：戦ひ勝ち攻め取りて其の功を修めざる者は凶、命けて「費留」と曰う。（修む）

慎む：利に非ざれば動かず、得るに非ざれば用いず、危うきに非ざれば戦はず。主は怒りを以て師を興すべからず。将は慍りを以て戦を致すべからず。（警む）

良将